孩子心灵成长

江苏工业学院图书馆
藏书章

大连市二十一

鏡花全集　巻二十一　第二十一回配本（全二十九巻）

定價二千四百圓

昭和十六年九月三十日　第一刷發行
昭和五十年七月　二日　第二刷發行

著者　泉鏡太郎

發行者　岩波雄二郎

發行所　〒101 東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號
株式會社　岩波書店
電話（〇三）二六五－四二一一

印刷　三陽社　製本　松岳社

落丁本・亂丁本はお取替いたします

© 泉　名月　1975

目次

彩色人情本（大正十年一月）……一
雪靈記事（大正十年四月）……一九一
雪靈續記（大正十年四月）……二〇七
銀鼎（大正十年七月）……二二三
續銀鼎（大正十年八月）……二四五
身延の鶯（大正十一年一月）……二七五
龍膽と撫子（大正十一年一月）……三九三

彩色人情本

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

一

山の手でも、東京でないと、こんな圖は見られまい。背戸の柿の樹へ顏の赤いお猿と言ふのが、木の實の數ほど飛んで集る山家の人たちに話したら、帆柱の頂邊へ天狗が留つたと聞くより、眞個にはしないであらう。……

御覽なさい。……麹町の、トある横町の錢湯の傍の電信柱に、今時は小櫻を藍にかへした鎧とも見える、ずッしりとした刺子扮裝、おなじく頭巾、手甲を、犇と一縮したのが、眞新しい草鞋のまゝで三人、鷲だと言ふ形で、勢よく、すつくと高く留つて居る。

空は冷たく、青く澄んで、北の方に、あはれ時雨か、凩が吹添つたら、時ならぬ白いものを、ちら〳〵と持つて來さうな、周圍は古綿の心の白いやうな、疊まつた一叢の寒い雲がある。

三羽の鷲は、揃つて其の天に小手を翳して居る。

身體は大地を離れて居るが、人間離れがして居るのでない。言ふまでもなく電信柱の根には三番組の纏を、バラリ馬簾に氣競を含めて、同じ粧のが一人、別に取卷いて消防夫が五六人。

別に不思議なことはない。火事は鎌倉河岸あたりと、三番組から駈出したのが、此の邊へ來ると最う煙が散つた。影の殘つたのは其の雲ばかりらしい氣がしたので、一人の兄哥が、

「待ちな。」

と聲を掛けると、手代に纏を渡して、いきなり、草鞋の尖をポンと電信の横木を踏んで、横に立つて柱を眞すぐに踏むやうに、すら〳〵と突尖へ駈上つた。

纏持の五十吉である。

不斷、默然坊で其の癖氣の疾いのが、事と言ふと眞先に身體を張る。……其の氣象も知つたり、仕事柄こやの輕いことも分つては居たが、足代ぢやなし、廂でなし、恁う電信柱へ飛上つた、はなれ業を見たのは最初だつたから、兄哥たちも、や、やと思はず聲を掛けた。が、いづれも血氣の大若である。遣つて見ろと、負けない氣で、續いて二人、いやアと掛聲で上つたけれど、何、あとの二人は、實は背中につかまり、裾に縋つて抱きついて居るばかり。

「燒芋は何うした。」

「湯氣は立つかい。」

「何うだ。」

と聲々。燒芋だの、湯氣だのと、火事を蔑にしたのでなし、何のと言ふ意氣組ださうである。

天邊の鷲は勢が崩れた。而して五位鷺のやうに成つた。
最う其で分る。火事は消えたのである。
一番低いのが、ひよいと地へ飛んだ。續いて順に下りた。
五十吉は默つて纏を受取つた。
で、恰も戰に負けたやうに、疎らに白んで、其の人數は、見附の方へ引き掛けたが、時に御存じの通り、錢湯の近間には、概ね御ぜん生蕎麥と言ふ、芬と堪らなく匂ふのが、控へて居る。
「なあ、おい。」
「然うよ。俺たちの町内ぢやあな。」
「働かずに蕎麥を食つては、煤拂だつて景氣が惡いぜ。」
「他町で食つ行け。」
「御免よ。」
「入らつしやあい。」とお定りの小婢の、すき切れのした眞鍮箔と言ふ金切聲。
「五十公は？」
纏持の兄哥一人、鯱が錨を擔いだ體に、頭巾を堅く、すた〳〵行かうとしたのであるから。「おや、兄哥。」

五十吉は草鞋を輕く踏んで振返つて、

「のびちやあ不可え。緣起ものだ。俺は纏を持つて居る。心持を惡くしなさんな。」

二

一時、煙とともに立騒いだ途上の人も靜まつて、見附なる火の見櫓の、大きく地に映つた影も消えた。——西日はあるが、町の色は、暮淡くして白う成る。

舊の見附を見通しの、三河屋の横の大通りを眞直に、向うの細い裏町へ。通りかゝつた……褄はづれ尋常に、山茶花の薄いやうな、素足をちら〳〵と吾妻下駄。片手に買ものの手つきの籠と、風呂敷を折つて持添へて、公設市場から歸りらしい。紺と藍の亂立縞、つい通りの襟の掛つた衣類に桔梗お納戸の無地の半襟。紺地に淺葱と藤紫、一粒鹿の子の段々染と、黒繻子を腹合せの畫夜帶を胸深くしやんとして、大島ではあるまい、が、しなやかさは肩に添つた絣の羽織。

太輪に結つた銀杏返に、目に立つほどの簪もなく、背負上の艶なる色も愼ましい。が、細面のきりゝとした、あか拔のした、五か六ぐらゐな中年增、色の白い、中脊なのが、往來の中に、一寸水際が立つと言ふさへ、時、冬なれば身に沁みさうな、輕く運ぶ足どりも、何となく姿が沈んで、眉に、もの寂れの見えるのが、向うむきでスツと通る。

後の方、遙に、纏をかついだ刺子姿が、小さく火の見下へ顯れたが、見る〳〵、見附を抜け、通を切ると、早く草鞋の音すた〳〵と輕く、馬簾を沈めて、唯手甲、頭巾、身一杯の唯濃い影も、底に火花の散りさうな、たとへば南天の實を腕に刺青したかと俠勇の血の湧く……五十吉である。其處へ來た。

同じ方向で、女の足は小刻に急いでも、屈竟な大跨で、一呼吸に、摺違つて、ト肩が並んだ。

然うすると、並んだばかりで、——別に瞳を注ぎもしないで、前途を視たまゝで、

「兄さん。」

と、先刻から道づれでもあつたらしく、然も心易さうに澄して言つた。

「……」

纏持は、じろりと視ただけ、頭巾を重く一歩行く。

婦人は其を不人相とも、何とも、聊かも氣にはしない容子で、同じく歩行ながら、

「火事は……」

と輕く言つた。

尙ほ默るのに、矢張り澄して、

「消えましたね。」

と言つた。

纏持は默然で、やゝ背を黑くずつと行く。

婦人は、はじめて、偶と寂しさうな顏をした。が、一寸散斑の櫛を壓へた。手先を其のまゝ、つと右の袂に入れて、突袖に、しやんと胸を張らうとしつゝ、其のまゝ袖口を折つて、胸を抱いて伏目に成つた。

爾時である——最うやがて半町ばかりは踏開いて居た纏持がぐるりと此方へ向直ると、やゝ及腰のやうな形に成つて、すた〳〵と引返した。

婦人の、其には、何の氣もなささうに前へ出るのと、ハタと合つた。

「火事は消えました。」

纏持は突如言つた。

「然う、可い鹽梅だつたわね。」

と輕く云つて、莞爾するのを、頭巾の中に、含むまで息を籠めて、容態風采を熟と視た。

「御免なさい……御新姐さん……いや、奥さんか。」

と、それでも、ぶつきら棒なものいひである。

婦人は默つて又微笑む。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

「いや、眞個に御免なさい。私あ思違ひをしたんだ。冷かされる……馬鹿にされるんだと思つてね。」
「まあ。」
と、餘りの思掛けなさに、更に言解かうとするらしく、氣を張つて、つい知らず一歩出る。
と一歩……退つた。が、纏の蛙股がずかりと婦人の美しい襟へ出るので、兄哥は退りながら、かついだのを繰びきに、ずかりと眞直に地に支いた。
馬簾の煽りに、おくれ毛がはら〳〵と、纏を渡る風一陣。

三

「いえね、氣になすつちやあ弱りますが、思ひも寄らねえ聲をお掛けなすつたもんだから。」
「然う、惡かつたの。」
「飛んでもねえ、惡いどころぢやありませんや。……と恁う言ふのが、ひょいと、はてなと氣がついたからなんです。いま、何か言ひなすつた時は、へゝんと思つた。——それもね、立派に消口を取つて、引揚げる處だと、己が身で威勢があるから、冷かされたとも、はぐらかされたとも思はねえ理合だけれども、現場へ道の三分一も駈着けねえうちに、みそ萩で、お前さん、苧殼の

送火を濕すやうに、びしやゝと消了つたんで、御新姐さん。」

と最う一度風俗を見ながら、

「姉さんか――お前さん、御存じはねえだらうけれども、絲の切れた奴凧と言ふ形で電信柱に引搦つて、おもしろくもねえ、雲を見て引返す處でね。組合の印ものを背負つてるだけに、半間さ加減が堪りません。……寒い時分だし、用があつてお歩行きなさる、分けても當節の婦の方にや、馬簾がお邪連に成りさうだから、肩身を狹く通る處を、(兄さん。)とお呼びなすつた。

此奴が消口を取つた時だと、(おう!)でも、(やい!)でも構はねえ。……」

と其の、おう!だの、やい!だのが、聲の發奮で耳立つて響いたので、兩側の家から人が出た。魚屋も、炭屋も出た。……尤も通りがかりの連中は、端から取卷いて彳んで居るのである。

慌てたものは八百屋お七が年增に成つて辻に立つたと思つたらう。通魔がするやうに、ツヽと舞戻つた纏は、横町に木戸を築いて、ハタと放火犯を堰留めたやうに見えたから。

「親方さんや、もし魚屋の親方さんや。」

と、もの和かな細い聲して、魚定を呼ぶものは、姓は關口、小兵衞と言ふ、伊勢の桑名から出た指物屋で、傍ら、ちよぼりと店前へ古道具のがらくたを並べて居る。……ぼとりと肥つた顏に薄痘痕のある、眉の薄い、ちよんぼり口で、目のしよぼりとした、頭は霜さへ、ぼしやゝと消

えかゝる、七十近いお爺さん、――鞐の取れためりやすの襯衣の胸を、くな〳〵に開けた上へ、古ぼけた印半纏、小倉の帶をちよんと結んだ、妙な風態、半股引の痩脛で、腰は曲らないが、婆さまじみた内端な足取、ちよこ〳〵と軒へ出た。膝の其の半股引の木屑を拂きながら、鉋を片手に、其處で隣の魚定に言つたのである。

「なあ、貴方、口をきいてあげなされ、なあ、親方さん。」

「やあ、お爺さん。」

と頤を引込めて額で視た。此の魚屋が面白い、近眼の目金を掛けて居る。

金齒で笑つて、

「間違ひぢやあないやうですぜ。」

「おゝ、間違ひではないかいな。そんなら、嵩どのはお出入さきで、あの奥さんに挨拶をして居るかな。」

「然ればね。」

「途中で御祝儀でも出たかいな。」

「とも見えないがね、何かね、風采つきが何だか、ありや何處かの奥さんかね、お爺さん。」

「はあ。」

と首筋を長く、撫肩で伸上つて、
「一寸、知つとります、委しうもないけどな。」
「消防夫は、親方、天王樣横町の、ありや五十公てんです。」
と、魚屋の小僧が小戻して御注進。
「突掛つてるんぢやねえだらう。」
「えゝ、そんな兄ぢやあねえんですよ。」
其の纏持は、さて、此方で——
「ねえ、お前さん、おう！でも、やい！でも、此方あ清く御挨拶をするんだけれど、劍尖が劍尖だもんだから變に旋毛が曲つたんだ、お恥しいが、ひがみだね。第一今時、此方人等こんな、やくざに、同町内にしろ、顏馴染もねえ、お前さん方が、口を利いておくんなさる例がねえ。からツきし見當はつかねえし、然もお前さん、意氣地なく悄氣てる處だ。……それもね、(御苦勞よ。)とか何とか言ひなすつたんだと、チョッ餘計なお世話だと思ふまでも、ふんなり、へいなり、遣放にも挨拶をして通るんでしたが、うぬが手で消さねえ火を、(火事は消えたね。)と言ひなすつたもんだから。」
「あゝ、惡かつたわね、それが氣に障つたんですか。」

「處がね。」

「いゝえ、でも、兄さん方は、火がかりをするんだもの。生命がけぢやありませんか。（御苦勞樣。）なんか通越し了つてるんだもの。……坂を上つた俥屋さんぢやあなし、暢氣に（御苦勞樣。）なんか言つてられやしないんだもの。」

「至極……」

と仰向いて、ト大な手甲で、拊つ如く膝を擦つた。

「難有え。――然うか、（御苦勞。）なんか大木戸を通越してる、生命がけの仕事ですか。……お前さん、然う思つて居ておくんなさいますかね。」

「えゝ、思つて居ますとも。」

「はじめてだ……涙が出るほど嬉しいや。」

馬簾も靄に、しつとりと、

「それでなくつてさへ、あッと氣がついて、お詫をしに引返したんだ。成程、燒死んだ亡者ぢやあるめえし、火事の消えねえうちに、煙の方へ尻を向けて、横町をのそ〳〵歩行く纏持つてのがあるもんぢやあねえ。（消えましたね。）と聞きなすつたのは、當前だと氣が着いたもんですからね。――承りや、まだ其の上に、生命がけだと思つておくんなさるんだ。堪らねえ。……お顏

は屹と忘れません。」
「可厭ねえ。」
「濟ねえけれど。」
「あれさ、堪忍して頂戴よ。」
「何だ。」
「どうしたい。」
と、蕎麥屋を出たのが見附から見通しの、こゝ夕靄を凌いで立つた纏のもとへ、ばら〳〵と駈つけた。
「やあ、兄弟、皆揃つて、其の奥さんに一寸、御挨拶を申してくんねえ——仔細はあとで言はあ、恁う、」
きり〳〵と纏を上げつゝ、
「嫣を賣つても一升驕るぜ。」
「唯今。」

四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo